



イチゴ硝子 (ガラス)

デコボコしてたり…
ブクブクしてたり…
コロンとしてたり…
様々な表情を持つ作品は、
どこか温かさを感じる。

「以前は設計の仕事をしていましたけど、自分は職人さん側の人間だなんて感じて…」
そんな鑑田さんが興味を持ったのが吹きガラスだった。
「あの『プッ!』って吹く姿が格好良くて!」
その姿に引き付けられ、仕事を辞め、都内の吹きガラス教室に通い始めた。



庭に作られた可愛い工房。
ここで作品が生まれている。

海まで3キロ程の距離、千葉県大網白里市に工房はある。工房は、以前設計の仕事をやっていた鑑田さんの手作りで「イチゴ硝子」と言う名前の通り、可愛い印象を受ける。この工房名は、亡きお父様が経営していた不動産会社の名前が由来となっている。

灼熱の中で作業は黙々と続き、一瞬たりとも気を抜く事は出来ない。その限られた時間の中で作品は作り上げられていく。



灼熱の工房の中には
1000℃以上になる溶解炉と
約500℃になる除冷炉がある

半年学んだ後、長野の工房、岐阜の工房で各二年間働いた。「ガラス工房で働いていても、あまり吹かせてはもらえないんです。ずっと下玉作りをしていました。けど、休みの日に三千円払えば吹かせて貰えて、それが本当に楽しかったです。」
工房で働いていても、ひとつの作品を自分だけで作り上げる事は出来ない。基本、吹きガラスは下玉を吹く人や形を作る人など何人かのグループで行う流れ作業が殆ど。一人で作るには時間と経験が多く必要になるのだ。

「ガラス工芸家の前田一郎の作品が本当に格好いいんです。」
長野で出会い衝撃を受け、いつかあんな作品が作りたいたいと思いつつ、目一杯楽しみながら作品を作り続けてもらいたい。



お酒の一升瓶を
再利用して
作られたグラス。

「形を揃えて、まっすぐ作りたくても中々上手く行かないです。けど、そんな言う事を聞いてくれない所も好きなんです。」
イチゴ硝子の作品は、小さな泡をわざと入っていたり、作品によって厚みが違っていたり、デコボコしていたり…どれも個性のある作品。ガラスの冷たい印象の中に、温かみを感じる事が出来る。

